

小  
精  
語  
鏡

以  
眼  
和  
十  
二  
月  
錄

特 別  
14  
1919  
709





精製茶葉

14  
1919  
94  
707



小粉得鏡

昭和十一年錄



玉偶請木偶

千星方口燈只一燈、千石萬石一杯飯

盡言在聽、夜言望聆

山河難易改、木性難移

哲人眼裏有西施

坐喫山堂



路上行人似似碑  
空裏得來空裏去

全默銀語

旗檀之を伐り命を董す

鬼の比て石の尸も時を暮る

素面の徳のまじ

慚愧の衆善の毛脂

海中とと松中、満死多し

湯しと死ぬ一人飲んて死ぬ千人

上圓而帰心異去時

一父十子を養ふは十子一父を養ふは

直如弦死道也曲如鉤及封炭

無事のこ次ひの良事

有理不在事形

移輪三向の大事と区敵

羅句語をむくまの内の大馬鹿かま



鏡に親しい程家多し疎くも

一人の敵も多き人こそ人の友も少き人過ぐ

自慢言懐も馬鹿の行どし

切名低半張

怖る向ふ又

騎つと久しからず焼くのを待て死すこと速し

以利害為塵垢以死生為晝夜

無事三次の良書の

家を考へんが竹の傍

頼まれればやうに竹屋の店に言ひ

新川柳

つふぬんらん今屋の道は板付

瓜先を博くしうに運ぶを嘆み

外りもはあう札に疎く判

軽業のやうに望む縁を踏み

花をさうり小暗い所を遊つて行き

心中のその親は敵曰士







花魁の添乳を扱けりやうに起き り川州

家令の下にり雛妓と仲かき

突き返す氣がわたりと涙を

大海の塵を掃いたる名人人を殺す

從善如登、從惡如崩

落武名薄の徳におづ

千日晴不厭一日雨便厭

馬場の花は悪魔の庭に咲く

人の蠅燭をちりちりせりとも自分の手を焼く

土佐と愛人の石もあふ内と愛人の骨もあふ

心殺しあふよ酒はかういふさかま

武士のあは樂の音の目とさきも、商人のあは鼻鬚の

舌に目とさきも、を合まよひ茶碗の音の目とさ

き

花ささうび夜うぬよる二十坊まも牛の鬣皮を

ちささうびくせ夜うぬよる五十坊まも鹿の角



翻譯者の又逆者なり Translators, Traditions

馬鹿と言はれ口根が生ず

いやさ男の就切もあつた男の無恥がよ

花の折りよく指のちり離れはたさる木のたや

唐ひさき洲やのささぐ山川の深き淵をこそ女は

汲いたる

わけのふさ林の跡の多けをいじりておの月をこそ

見ぬ

のりあつと思ふ心の板橋よけに花の吹うぬ

こゝろは

神の物を世つらやむさ女の人をこそ以てま

舟子七カ臨せえんか神助る

和風穂枝る神をんを守ん、狂風怒濤る我をう

る我と守る

手のひらく回りのゆる穀河を

谷名が呼べい楽行のあくる

谷名

谷名



あふぬ振すゝ娘のまゝさ  
魚船ぞ七十二灘上り築子記  
柳さくや三寸程の上り鮎  
宴けり山消も夕暮る塔一つ  
宇治下り祭のみ舟や夕かす  
ほしさを川を流る灯は待乳  
うすしを柳けし衣桁や風流る  
夕暮るおぼく、輕の野ふ

秋来ぬと柱の拂ふ動きけり  
鐘の音の輪をこりて来る夜七五  
行秋や一十年のほとけたる二月也  
行秋や移寐としてあきま  
あき夜や孔の死する三回志  
道帆の舟は日暮るの端くけり最後の夜  
あま山あまあま七日昇あけける浮舟ふ  
あふか中に最古思ふるあま山ふ



十年の狂態今もあつ山子、其 白痴  
 冬川や家鴨四五羽にまゝぬぬ  
 冬川菜屑ついでに家鴨も食  
 夕飯に世湯ゆらぐあかさま  
 何事も皆偽の世の中に死ぬばかぢも真つら  
 山川の末に流る、椽かき又をすそこをばあ瀬の  
 あり  
 心にはかゆ〜ふの湯さかくりい、いはゞ思ひをいふ

まゝの

睡者の寝に逸れず  
 穀を搗いて米を鬼に投げ、糠を神に捧ぐ勿れし  
 王は十善神の九善  
 愛の行く所、法を創り、湯を多量とせ、垣とせ、  
 友たりの、賦有り、蜘蛛の糸か話、  
 百年の齋禁も尚乳歯を有す  
 十年宮下無人問、一本成る天下の



〇 庭をよこし 風のものや持たずく 冬代  
 の焚くまどに 風がたて来る 木もよかる 一葉  
 のわが待ちし 秋はきぬらし せちこちのくさむら  
 ごとくに 白粉の 散る ちりちり  
 〇 此の夕秋 来ぬらし 我らの 谷のまがき せん 鳥  
 の 鳴らし ちりちり  
 〇 飯もよき 運ん せむ はず ころころ 雨の 雨の 雨  
 ららら 降る ちりちり

〇 山かげの 谷の いはらう いと 寒し 柴を 林火きつ  
 ぬと ぬく ちりちり  
 〇 うづみ 火も やー せー ぐぞ なる けし ちり  
 の 山へん ぶちや 降る ちりちり  
 〇 わが 庭は 田上 山も 冬に せり ぬき ちり  
 人の ちりちり ちりちり  
 〇 山かげの 谷の 雨と ちりちり ちりちり ちりちり 我  
 の ちりちり ちりちり



○はきんしのの盛の下ろす芋すくも子の寝んこも  
つきせあけん言る

○山松のほととぎすゆき、嵐にもうらやまゆき  
のかけの冬草 同上

○倉ふ物いつく寒さの 降くまらちひさき火桶す  
かりあさる 暖色

○汐のせしむゆきくはしむこいぬふくまらきん  
まらせらあまらあらし 同上

○是の以前無地無地是の以後無地無地 草花

使入千古御地  
○わびぬんじわが原まらば帰らまら心やすきを思  
いぬん あり

○手おりにこいそむの事者いうすくもあんなた  
まらぬ は いふ あ の ま ら に は い ぬ

○かたむきをなぬかのこいそむ 春の老真  
秋のちみぢ 草花 ら を 前 世



○瓜ニキト一ト月はさやけ一いざよんをどうのさよま  
のるいりいらるる

○いざうたぐわんまちはんぬむ玉の今宵の月に  
いゆるいしや。

○のまいらみ喜にほく秋の節ちかわがあところ  
は武蔵の原。

○くろいのい膚の汗の光うい いなみ  
○漁の舟のいほけ交りたい裸うい

○煮海や島七見えざるいしい

○殿作りすまやに糸の山原い

○昔もやふもあやむる遠入りけり。

○無用の玉紙思ふらひあきと死いつらい

○放屁い不い俗い論い道いをいにくみけり。

○田い人のいないるい御い言いのいよいきい日い前い

○雷い公いのい轟いきい夜い一如いくいらい い飛行家いをい早い

○汗いをいたいむい額いのい敷いのい深いきいういふい



〇うらをひて静かきかきつはら  
 〇栗と拾ひに行き庭とつゝか山路こふ  
 〇桑の花や黄檗の傍今誰  
 〇秋枯れし山門より南無寺  
 〇あま山子さく静けくの姿よふ  
 〇豊後守の雨のあま山子沈む花  
 〇山の守りあま山子も兵火の年人  
 〇病室の法河路のかきしつふ

〇俗めきし風鈴ふるや僧の長洲  
 〇道傍の赤のまんまの蛭こふ  
 〇あき窓の草葉波のあま月夜  
 〇桃柳村の縦横人の生活  
 〇遠の竹の柳ばかしのおぢ  
 〇奥のく算尺わらや翁の春春  
 〇時針鳴るよどい尚守る花の春  
 〇福あつる遠の茶屋のあまのこ



○北の一人いつ迄痛を刈る人が  
 ○又無湯の静かなる痛の村  
 ○のち埋の墓とあり花りけり  
 ○友の犬宮芋堀つとんをもてさう  
 ○寒惨に柱も細く思ひこふ  
 ○所と昔に哀しく寺や陰夜の鏡  
 ○手をおけし開く推し下や母猫の夫  
 ○志猫の雨はちけあき屋こふ

○志猫とあんなみのうとあま  
 ○我座をゆるし夜ちぬ猫のま  
 ○君堂の猫装をまに色ひけり  
 ○菜をへん人越れわさき居る春のふ  
 ○砂渡に往ぬ泥定し春の雨  
 ○家庭へ七日冬流の如を打ちけり  
 ○眼到心到身到 清か三別  
 ○留若作法而愚者制焉 留若更礼而不







春景

大正三年

○四月の鐘四方うその突きぬ

○映日明窓

○儉者好簡

○月未冷雪白、爪及碎時時

○琴酒相奏

○古杉怪石

○心静鳥つ長

○板山起海

○鶴心すいぶの雪見果かき 七命寺

○せと絶望も下駄の歯を杖が握り

○どつこいくと芭蕉二三丁

○かんのこんの比名をのける 後ひ出し 秋と松屋

○もろ雪七息子 枯竹まゐるかき

○隅の川まゐるあんなんやのとまのき 白ひだ

○まらぬて未れ奴か涙を二層こぼし

○白蛇原の年々あたまをまく所さき

春景

大正三年



○入相の鐘ヶ淵

○ついでに鐘ヶ淵

○久松七重と鐘ヶ淵

○久島に二の宮の宮陽田川

○瀬をかく住む島

○島の名七のり息子の氣七のり

○陽田川我思ふ子に向う

○真比の橋前女の房試かき

真比橋前

○年定ふ行くと真比の

○田楽を公の免も角七ともかき

○田楽ちや飲のぬか子の娘り也

○田楽心くつす小判の南加也

○田楽むゆつがるんのはる也

○倉根船く遷(遷)子とて堀の煤山谷堀

○山谷堀舟に子の注十三日

○堀、曲ると千三と船をつかひ





○まゆ丸びんぐら〜と堀く着き 山谷  
 ○汐時をさくくまを堀く着け  
 ○決着せぬぬ船取堀く着け  
 ○かぶろ船堀く着けろと勝つ奴  
 ○船名の内儀速目の自慢を  
 ○御杖堀ろ〜と中房の清くひき  
 ○舟をぐいと突いてお山の内入也  
 ○ま原の本地のまこと待乳山 待乳山

○抱き附のまこと真ちく猪牙を食  
 ○聖天を天鼓羅うと願をかけ 浅草寺  
 ○小粒のまこんえとくんの大伽藍  
 ○人馴んぬ堀の一寸八公逃げ  
 ○提灯の釣鐘まけり浅草寺  
 ○提灯を煙の名人共納め  
 ○朝帰る田圃の狩野の馬うま  
 ○武士もいや町人すぬぬいろは茶屋 いろは茶屋



○凡俗の及ぬ程にせしつとこ

うは茶を

○此まてめん野郎も這入ついろは茶を

○ま原のいろはが秘程御魔えり

○苦竹の痲癖マダマダえりいろは茶を

○いろははかき多所行く上達と

招岸

○ま原雀千ヨツくと母の雪

○一杯いぬあか合つに母の雪  
○汚泥に浸きぬ花をえと不義と上りお急と出合茶を

○出合茶を巻の首がニツ来る

○出合まるとこを白鳥のろり見

○此世から一つはつすの茶を茶を傳

○福もも蓮の表見のおちりさ

○蓮飯の五の月まつて腹が張り

○蓮坂と顔見合せしにモヤリま

○殿ニツ池をのぞいて憎かえん

○池の名とおもらるるのまるところ



- 不忍の庵をむかふにことせしむ
- 隅田のりいゆんのきよあやう 湯田
- 女氣あひまぬといひく引ずる
- おこ痛え行くらくと湯田川
- 引かづつて来るとしこく海守
- しよひき乗せるとをかしの海守
- 陽向是から聲の道いさ
- 名もーあふ名をかきりむ智ゆり

- せりせ向ふの島まむと智あふ
- 吠える犬手桶をかぶり追ひま 俵吉年の市
- 仁和寺の鼎手桶の浅き寺
- 大門も手桶のくるとにぎやま
- 馬鹿な形の手桶をかぶり引すん
- 手桶を取んかや市七んと禿
- 櫓木と七ろ手をかけて禿引き
- 北吹に来ると招木マアとこーヤ



○木の尺ハセきくくる市ノ尺

年の市

○市割の道鏡卷内と市の空

○ふあじむせふいひむきくくし腹をかけ 楊枝を

○淡黄裏ふふむもろいん古長

○乃めらのはるいかと 翻る楊枝を世

○平内ハ神と佛りまぎんことり 糸玉

○神ハ佛ハ佛ハ平内わたり

○平内ハ祿を著ル文づらん

○平内ハ望し乳むの柔らめ

○平内ハ先祖洗濯見しな

○人化かす狐七土 園子ならひ

皇極編奇

○皇極の供物のやうな世基名

○かむん中撥きく 立切つ土園子

○土園子庭庭とええり買人

○皇極の園子の七日母か

○すつはりと流りまゝれと白果か



○あつさうる鼻も園子むつけむやう

○濡れやすき人の心や思さくら 抱

○やまの夜一針ぬきのちかき

○つらぬ回もろく回も動く蛙

○刈りけこ<sup>ガ</sup>待つつら田のまゝも

○なまると都のえわるを

○山姥子の花を相手や世捨いは

○解脱と魔界のうらみ散子の花

作はるはと  
陰を

○考や中井の井をみちる

○片足のちろり下けたら

○乙鳥や汲んひけら <sup>かき</sup> 榊

○魚の北目は鈴公山のちみ

○さびーさのうんーくもあつ秋の音 <sup>ま</sup>

○日のまのよ夜の花吹けら <sup>ま</sup> 蛙

○柳散り流る洞んるところ

○たきとるをせう寝れといふを



○ 蒲條とて石にのり入らばやいふ事  
 ○ 遠き日の積りて遠き昔こそか  
 ○ 花七の物公のすもも書意の分  
 ○ 門を出入り我も行く人秋の落  
 ○ 破あつ子の無くて清子の空さこそか  
 ○ 手折えし人さ香らや梅の花  
 ○ 手はさし垣根を倒す雲  
 ○ 草虫あつたる終るさ日ぬれ

○ 行きしとて倒んあつても秋の原  
 ○ 園古逢秋好、積空得月多  
 ○ 小築成直趣、幽居逐野吟  
 ○ 飛閣凌空若、高窓度白雲  
 ○ 文墨有真趣、山川多古情  
 ○ 遠岫千里翠、長江萬里清  
 ○ 温暖如人意、纏綿動客心  
 ○ 若問梅消息、且待鶴归来



○園静花留客、亭间鸟惜人  
 ○戶外千峰秀、窓前萬木低  
 ○柳塘春水滿、花塢夕陽暉  
 ○鳥啼皆有迹、苔綠柳如絲  
 ○遠水碧千里、夕陽紅半梅  
 ○長劍一杯酒、高樓萬里心  
 ○月移竹影侵棋局、瓜透花香入酒樽  
 ○水色山光皆畫本、花香鳥語是詩材

○こぼんてい風拾ひわくふ鳥うふ  
 ○木かぶあのこぼんてい鳥や秋の爪  
 ○法や蝶の力の押くも  
 ○深き岸にふるや蝶の糸  
 ○梅うきや雪か顔出す雪河あえ  
 ○つまついて満えつまついて飛ぶ雲  
 ○法ばあを解あを凡の物くも  
 ○うぐいすい起せどゆめる柳うあ



の花咲く身は狂ひてま御いふ  
のさかしくも風をまかせ枯尾花  
の根は切れぬ極楽のち枯尾花  
○いつここの身をばよせまう廿の中は志を  
いとほぬ人こそけん心為難  
○其君俱是塵塵氣一日不世無此氣更去龍  
孤得春雨自抽千尺拂ち雲 梅道人  
の此君不可一日無 終着数早治有餘 雲葉

風梢承研滴 滿湖一曲在吸塵 口上  
○動輒長吟詠即思鏡中漸見髮底絲 心中  
有箇不平 時畫客能扶竹幾枝 口上  
○見天地の風雅を萬象もまじ風雅を此  
風雅佛祖の肝腹を 是に隨つて四時を友と  
す。見の所花よりわらわらふやま 如女の所  
月よりあふかといふ事や。心月のあふまは  
禽獸に等しくかたは花をまてんは夫杖と







鬼神言盈而福通 易、道卦

福通在純約、言盈由 粉、驕 藩邑之清

斜陽滿徑照僧遠、黃葉一村花寺深 漱石

樹甘露沾雨、滅陰煩惱焰 龍音經

竹外桃花三面枝、春江水暖鴨先知 東坡

校抄や命をかくむ、比かつら 草堂

日月即燈燭、乾坤是屋簷、寬肚皮容物、豁  
眼界此讀書 星屋

○秋の枝美人の腋りしきあり 杞

○鳥迹の是世の白きく川向ひ

○を念にち斯くも人のぬきあひ 破呈

○え田一きこく移す 静の

○朝白く下平のかくさく 表法

○去檢快馬亂雲湖、知是仙居迹 秋

○大波の破七とどろの寄す浪おれ 秋



裂けを散くこも 実報

○夏川を映すうんしよよ千の岳履 廿五

○紅さいの口も忘る、清くぬくも 千代

○一棹烟波

○一棹接山

○八の字のふんばり居し夏の市士 北

○人魂が行く氣散る夏の原 日 廿

○飲馬丁東向晚涼 八 廿

○随安為主 立 上所皆真 程

○茶蘼草葉雨疎み徒根長流入港後湖痕

○扁舟一棹来何處 其葉中 蝦 瀬村 廿五

○香花村巷菜花畦 霞之 耕 鋤 近 午 鶏

○欲向春分沽一斛 柳陰三尺酒 醉 低 日

○雙し燕子繞屋輕 鳥衣と 茶 烟 對 勉 海 深

○陵日長無客到 木 蓮 花 畔 後 徑 都

○去来雖謝是間物 亦有 君 伴 遠 行 莫 笑



山人背梁夜為月擔月送殘生

○下り下り下りの圓の涼いさよ

○鼠入錢筒投則不窮

○大鵬六月有尚去仙翁千年無倦容

○落霞驚鷗風四揮未注鬼神

○墨花浮沼池筆彩飲虹霓

○世路風霜吾人練心之境也世情冷暖吾人忍性之地也世事顛倒吾人修業之次也

○露影落仙杯

○積明沈舟

○奪天地造化

○石韞玉而山暉

○守身如執玉

○水懷珠而川媚

○春名春二つふる塗り枕

○子と持つてやうく親の馬鹿かた



○心中のいや道中ハ一七九  
 ○糸巻の向ふん亭主語つてゐる  
 ○道々ぬい通さうための道善清  
 ○母親の息子の喧嘩をいしてやり  
 ○産あけく良人使あかくせえさ  
 ○糠味噌く思ひ切の手の美し  
 ○そこら迄行そわが金女房か  
 ○夕まゝ急かぬ人の先を降り

○天童加淨の風鈴の詩云々

道身さん口よりいふは批の

後せず東南南北の風

一等に染の若の一般を淡す

洒下東より洒下東

○某氏の府右の録云々

一銚の如く目的を替く人があつた

一磨の如く時勢と共に進出する人があつた



一 塵遠鏡の如く物々の見遠くの人である  
 一 名刀の如く事々晩い果敢の人である  
 一 蟬燭の如く心身を盡して世を照す人である  
 一 鏡の如く頭腦明晰で正互の人である  
 一 扇の如く伸縮自在が末廣が人である  
 一 物指の如く大小を秤り得る人である  
 一 金庫の如く深く花と泰然自若の人である  
 ○ 其其心而待物

○ 羣鴻致海  
 ○ 羣鴻留爪  
 ○ 水能性流為吾友 竹解心處是我師  
 ○ 真人當高節 徒自抱之憂心  
 ○ 風煙俱淨  
 ○ 青山如故人 江水似美酒 今日重相逢 把酒  
 為良友  
 ○ 被褐懷玉



○白梅や枝が軒端のこぼれ程 井月  
 ○山いもい鹿の子まねらや梅の花  
 ○梅の香やせせら 振七や丸はなち  
 ○春あやしのまのひじり扱  
 ○何ふやらの終り終りさあさあ  
 ○陽炎の動あすなりの華あさ子  
 ○降るとまむ人は見まも花見  
 ○魚影のたまぐ 見えそあ温む

○花合りぬ心を軟む梅木  
 ○息すふ猫の影さう陰子  
 ○石根裏の出合がしとや猫と猫  
 ○差路の瀬に履きくつや舟  
 ○山門を出んば日暮茶桶歌 昔念  
 ○秋海棠西瓜の色に咲にけり  
 ○牡丹散のて打かささしぬ二三片  
 ○梅一りえ一りんはどのあはかき



○ 巧者まて北斗にひく砧引  
 ○ 穴にのりく陰をう蟹の爪毒し子規  
 ○ 竜どのいいくつ年の年か中士の山一茶  
 ○ ゆりくさ魚めすふのや崩れ山梁 文彦  
 ○ 雨どの雨氣こはぶさあり着成 日星  
 ○ 舟屋をえて来た船の小舟外 日  
 ○ くりみ玉沖の時雨や美所 日  
 ○ 蓮うけり沖の時雨の行とところ 日

○ 我ゆきと泥糶り逃げし根芥あふの  
 ○ 寝かへりの方じんをちやきりくすの  
 ○ 舟が石の下やあふの身の終りの  
 ○ 周子拙賊云 巧者言拙者黙 巧者言拙者逸  
 巧者賊拙者徳 巧者凶拙者吉 於嗟天下拙  
 刑政徹上安下 順爪清徹絶  
 ○ 訥於言敏於行  
 ○ 智者見未萌 戦回系



○思入玄

○斷金侶

○方貴實

○濟美 左傳

○天福 列子

○樹德 書經

○鴻志 戴叔倫

○清身

○披腹心 史記

○心如石 史記

○惜寸陰

○惟後惟耕

○與天地同壽 楚辭

○寂寞天寶後，園廬但蒿藜。我里百餘家，  
世亂各東西。存者無消息，死者為塵泥。賤  
子因陸敗，悵來尋舊蹊。久行見空巷，日瘦











○剛則折，柔則存

○對青山依綠水 沈石田

○讀書三到 目到耳到心到

○海人不倦

○濟美

○寡慾心方能留靜

○豁然貫通

○恕字終身可行

○任大事而成大謀，慎也。臨大故而全大義，忍也。

○吾生莫放金叵羅，請君聽我進酒歌。為樂須當少壯日，老去蕭蕭空奈何。朱顏零落不復再，白頭愛酒心徒在。昨日今朝一夢間，春花秋月寧相待。洞庭秋色儘可法，吳姬十五咲空爐。翠巾鈿珠終為誰好，喚客那回錢有無。畫坊信箇臨朱陌，上有凡光消未得。扇底歌



喉竅竊聞、尊前舞態輕盈去、舞態歌喉各  
盡情、嬌癡索贈相在行、共衣不惜重醅、日  
落月去天未明、君不見劉生荷錡、真落魄、千  
日之所亦不惡、惡、又不見畢君拍浮在酒池、  
蟹螯酒杯亦手持、勸君一飲盡百斗、富貴  
足章我何有、空使令人羨、次古人、信得浮名  
不如酒 唐伯虎

○花叢千枝月一輪、天將花月付詞身、或為月主

為花主、倦作花窟、又月窟、月下花叢留我的、  
花奇月不厭人貧、好花好月、心多少、弄月吟  
花有主人 望上

○點粉妝、小才兒、女力、心、心、心、  
の山、さくら、ふ、志、深、衝、の

○日暮黃山遠、天寒白屋貧、柴門艾犬吠、  
風雪吹得人

○君行豪邁出、身謀我、衝醜狂、就為我



憶起無蹤曰是夢尊前一尺海山秋  
景山竹原  
天氣極星

穀子成詩

○片雲生半壁一榻臥千峰

○水如碧玉山如黛雲想衣裳花想容

○也似肌のちのき血沙儿觸るを淋しからずとる  
を後く人品子

○硯田無稅

○村情山趣

○點滴穿牙石

○涼如酒

○身帽衣衣坐談兒賊氣撲面慘紅眉

丹古終有難描霞滿肚肝腸赤陸離山

○あふたふと古葉若るの日の光 芭蕉

○日夕是如日 碧峯

○教也者長善而救其失者也 禮記

○凡學非能益之也達天性也能全天之







持贈君

陶弘景

○君子ハ三端ヲ避ク、華鋒端、舌端、人三端也

○十九世紀の癡見ハ婦人ハあつた又ハあつた、人間の善見ハあつた。

○仰觀玄澤周、一息萬里奔。

○夫樹與枝葉、爪霜不復侵、韓退之

○筆硯生涯

○從容不迫

○鼓がたつて泣く境の即應ハどう若

坊五浪五一五人豊田のつ下也

○天靈怒、神ハ起、卷起去、濤如山、岳十萬

舟、艤の時霞、休休休、莫莫莫、勝主遊止

再奉儀、虫類、夢者、勝皆為、吾未精、寧

五百年、無復一妖、何者、莫、莫、莫

客謀、咸武皇、張壓、群、酒、城、可有脚



日千里北伐南侵得自由，志氣似欲并吞  
五大洲。已掠支那略天竺，偏師到安南  
無敵。或云餘波及琉球，得非借路窺皇  
圓。此不才白日出安金鏡流，鋒刃之利笑  
干鏃。當其短兵接戰時，流星激雷光閃  
燦。縱令凶孽千百億，手弄火械機亦不  
遑。貴亦不遑中，命在破竹只一擊。何况  
日靈在天役軍神，笑歎大艦。輕若履

嗚呼凶不才昔時為古來，能生還者僅三

人

於茲兩午夏六月

今在伊德

聞西洋勇船至琉球

○窓納晨光看影斜，洗硯振毫試塗鴉

朝來嬉事忘如否，新種冬蘭抽一花。山陽

○綠柳陰濃夏日長，梅香倒影入池塘。冰晶

羞動嫩瓜起，一架薰蕪滿院香。唐の古對

○飢食松花渴飲泉，偶從山後到山前。陽坡

軟草存如織，因其康菜扣對天。(盧倫)



○僧舍清涼竹樹新、初經一雨洗法塵、微風思起吹蓮葉、古玉盤中瀉水銀、唐の施肩負

○半江の斜日片雨の時向ふを其意也

○水少いなきは是少く夏雨なき未也

○去年ハ小使くさき姫焼、多一茶杉代高四毛の  
焼餅を焼く

○星の名をよく人ヤ門涼子規

○夕涼よき男に生んず其角

○戸をぬけも故情に暮のまへ其意也

○蓮の香や人をばさるる其二寸

○窮六樂通亦樂亦

○骨帶三分傲、情餘一半癡

○醉淡天下言、笑讀古人書

○一襟和氣

○小窓和雨夢梨花

○此中有真意、欲辨已忘言

○偶然而成不後用心於此



○ 橋之風節

○ 白雲合如古

○ 百年一夢年

○ 天馬辟象心 海關百川經

○ 檢書燒燭短 看劍引盃長 杜甫

○ 天仗風華盡 雲鶴山樓 霜行 後葉銘

大津  
白子

○ 仍性松心

○ 七盤法身出

○ 松下看雲 讀道出

○ 舟過山迎

○ 明窗棋一局

○ 千慮無惑

○ 登嶺眺遠

○ 長風

○ 山流九壑在 月洞風來



〇老いぬんは西血にこつ踊る葉水  
 〇瓜の香は狐躑狐躑の月夜白雉  
 〇夏山や覗けは揺る片魚龍滝瀬川  
 〇夏の月丸田見廻瀬川つる龍と子と  
 〇自咲飄々跡未休松原風吹白入思秋鹿鹿軍妖  
 陣皆奔潰一剣霜寒大沙軍鹿  
 〇狭き川も入ん減亡利門大きく道の道は  
 唐く末も為る一遊け見んこんも入るる

しい命の門の狭くまの道は難くこん  
 を見出すもありさき也  
 の思想の容のけきらももの最初の来のり  
 動して吾々もも任の無い、併しもも、彼等が  
 再び、若くいて後、直とももをかやらるる  
 のいまとして彼等をゆくまはる、おんの●能る  
 むらるる今の心を思つてあらるをゆくまはる  
 実のすまひももも  
下ルスト  
一日一善

繪巻

171



○何人かを犯す悪に向ひしめきかへる。アメリカ人の  
間を柱ける如き法律の狭如く、或ハ強盗巴支の人。  
間を柱ける如き法律の過剰か、と問ふに、双方の生  
活諸條件をえられたる人ハ又すや答へるに、  
勿論過剰の方だと、とて羊、自分の心まにほつ  
とかん、狼の世話もするもの時ハ幸福であること  
の自分の生活を保証するものも、吾々の為す一切、  
駝鳥が自分の殺せんものも、思ふにやうにと首をか

す時やうは、と全く同じである。吾々のやり方は  
駝鳥も更に柱へ、不確かな未来の不確かな生活  
法を不確かな保証するものも、吾々の確かな現  
在の確かな生活を保証する彼等とせざる  
も、  
○無垢と凡かゝる完全の可能性を持つてゐる。父親が  
絶えず生んで来るものとして、世界の中心を  
世の中心として、  
世の中心として、  
世の中心として、

論議

論議



○人の心を探し求むるは、併し自らも若くは彼等  
との居りし自今違ひ失ふ凡そのおとはつたり又そこ  
とさく出来ぬもの、彼等、現在在るの獲得と對して  
行はつ、ある努力をも、命その脱却の使をあら  
る。

○安樂の生活に即せれば、傾向は人生の程々如何  
なる不幸なるもの、是つを予好むと云ふ年輩の  
から働かざる教へ懐く懐くす、極むる大切なるもの  
なり。

○あるもの有るもの、而して古きもの對しては、  
亦大なる障害となるもの、吾々の此の世に於ける  
の位置を把握し、是れと云ふものあり。

○極めを有るもの、一日時にして、大なる不幸に  
導く悪の誘惑の一つ、又人々が「これ」といふ言  
ひ言ひ現はさるるもの、誘惑心である。

○凡そを研み、理性の才の、  
道つゝ、

無常

無常











教く授けり上りたてまきり彼を為りぬく支拂能  
力を結く何か異る目的の為めに八段五つとてを  
善く善くのりてとて八段等何の位打しぬく技  
等の人留と善く善くの導かす。道を掃き高  
めりぬけぬある せふ力

○名はあらく神にこれぞいふ事あるに家 権良

○わが影の如き一山夜やきりくす 莫冬

○おかけし寝よとや張のきりくす 文州

○つゝのあす所く掃をきりくす 白

○白髪ぬく松の下のきりくす 若菜

○黒丹けし行旅を泣くきりくす 櫻人

○十ハかり年あす夜や花のこゑ 英冬

○米元章論石曰瘦曰緇曰流曰透 可習

墨石之妙

○煙の半三秋色、波濤為古痕、削成古玉片、  
截断珀石雲根、風氣通、墨室、苔文、後洞、

Amamiya

Yuki, Sakurai, et al.







則十齋  
也

人。

堂居鳩



